

ホーム・レコーディングのすすめ その2

45にこだわった 2作目をレコーディング中 中北英紀氏の場合

インタビュー・大塚康一 撮影・吉浜弘之



ホーム・スタジオは、地階の縦方向に長い部屋。録音機材を納めたラックやマイクが立てられた左手にはキーボード類が置かれ、両側の壁にはギターが掛けられている。正面にスクリーンが見えるが、ラックの後方には液晶プロジェクターが設置しており(上の写真参照)、ビデオが大画面で楽しめるようになっている。まさに自宅録音派の極という感じだ。



以前、本誌(8号)に登場された中北英紀氏をご記憶だろうか。神奈川県で薬局を経営する傍ら、自ら所有される数十本のヴィンテージ・ギターを使ってのインストゥルメンタル・アルバム「ACOUSTIC GUITAR STREAM」を発表されている。このアルバムは評判を呼んで続編を望む声も多く、中北氏はこれに応じて現在第2弾を制作中だ(取材時)。氏のアルバムは自宅のスタジオでレコーディングされたものだが、そこにはアマチュアながらもアコースティック・ギターの録音に関する数々の創意工夫が存在している。

中北氏のホーム・スタジオは、前回の取材で紹介されていた通り、地階のオーディオ・ルームに隣接した縦方向に長い部屋。手前にはマニア垂涎の楽器で構成されたオーデ

中北氏の録音風景。ラックを前にギターを弾きながら、もちろん全て自分で機材を操作しながら録る。録音方法は極めてオーソドックスで、メインとなる2本のマイクでギターの上にダイレクト音を拾い、上方にセットしたアンビエント用のマイクで空間の広がり感を出すのである。部屋がデッドなので、自然な響きが出るように工夫しているとか。ちなみに水割りを飲みながら弾かれるそうだが、グラスを置くときにコン!という音が入ってしまうのが困りものとか(笑)。

ィオ・システムが並び、その奥に録音機材とマイク、左手にキーボード類、モニタースピーカー(複数あるが後述)が置かれている。

メインの録音機はローランドのハードディスク・レコーダーVS-880。既に生産中止となっているモデルだが、発売時から評価の高かった逸品である。何よりハードディスク・レコーディングを、誰もが手軽に家で出来るようにしたという功績は大きい。特に一人多重録音をメインとされる方にとって、ミキサー機能搭載のデジタル・マルチレコーダーは願ってもないツールと言えるだろう。そしてマイクについても、こだわりが見て取れる。

「実は前回のアルバムでは高校生の頃の古いマイクを使ってましたが、途中からAKG(アーカーゲー)になって、今回はメインにSEIDE(ザイド)という真空管のマイクを使っています。このマイクは音質が太くて丸くて素晴らしいんです。ただ高域のほうの出方が詰まり気味のような気もするので…セッティングのせいかも知れませんが…あと音場感を出したいので、上のほうからAKGで拾ってステレオ感を出しました。デッドな(残響の少ない)部屋なので、上のほうのマイクにリバーブをかけて、広がり感を出すようにしてるんですけど。ただし、前回のレコーディングではエフェクターをかけ過ぎたこともあるので、今回は反省の意味を込めて最小限に…全くかけないというのにかえって不自然になりがちなので、そうならないように心がけました。ここでの録音方法はカット&トライでやっています。それが一番良いかどうかは判りませんが、昔からクラシックなどでもオンマイクで録って後ろで拾ってる場合があったので、同じようにすればいいかなと(笑)。ギターによっては音色もそうですが音量が全く違うので、マイクの感度を絞ってるんですけどね。フロントの2本のマイクでミックスすることもあるんですけど、だいたいネック寄りが多いのと、ボトム方向からも狙って。最初はマイクの数も足らなかったんで、最初のCDでは中間辺りを狙って録ってたんです。ハードディスクで録ってDATに落としてマスター作ってますが、ほとんど音の劣化なしで出来ちゃいますからね」

では、録音時に一番苦労されたことは? 「雑音、騒音です。夜中に録音していると、子供達が起きて風呂場を歩き回る音とかが

入ってくるんですよ。それと、お隣の車の音とかね。また、エアコンの音が凄くて、夏場はしっかり冷やした後、冬場はしっかり暖めた後にエアコン止めて録音してます。除湿器も自動でかかるようになってるので、雨降りの日なんかは無理ですね。止めてしまうと楽器に良くないし。湿度は60%以上にならないようにしています。冬場は冷えてくると、指が動かなくなって辛いですよ。あとは、何十回弾いても上手くいかないときでしょうか(笑)]

音質へのこだわりも一流だが、この辺りはオーディオ・マニアとしての顔のぞく。「ハードディスクで録ったものは、マイクのレベル差を合わせるために、3種類のセット(モニター・スピーカーはパイオニア/マッキントッシュ/真空管アンプでドライブするタンノイ)でチェックします。最終的にはマッキントッシュXRT-20(知る人ぞ知る

大型スピーカーの傑作)で聴く音を、重視するようにしています」

AC電源も専用の電源ユニットで200Vから100Vにステップ・ダウンして使っているのだが、SNや音の力感やプレゼンスなどの面で改善が認められるため、マニアの間で支持されている方法である。

で、今制作中の2枚目だが…

「1枚作って満足してたんですけど、買ってくれた人と知り合いが「2枚目まだなの?」と冗談半分で(笑)おっしゃるので、じゃ、D-45をメインに使ったアルバムをやってみようかと。やっぱり音的に魅力があるし見た目もきれいだし、45を使ったアルバムがあまりないもので。本当はギブソンのJ-45も一部使ってるんですけど、僕も今年で45歳になるんで、それに引っかかっているんですよ。また、45もどきの派手なギターも使ったりしてます。前回はいろいろなギ

ターを使った音色の違いの面白さもあったと思いますが、今回は45タイプに限定して、各々の個性を出せればいいなと思ひまして。マーティンの「ジーン・オートリー」なんかは低音がドカンと出ますよね。それに合う曲を入れたり、僕の持ってる'69年の2本でも全然音が違って面白いし。'72年になると、また音が丸くなっちゃって、年ごとに変わってるから同じ音はほとんどないですね。その辺を出せればいいと思ひますが、ただ録音もアマチュアですから、勘弁して貰えるのではないかと(笑)。今回は仲間と演った曲があるんです。同じギターでも他の方が弾くと、また違った音になりますし。誰かとユニットを組んで、アドリブでリードを入れていったりするのも面白そうかなと」

中北氏のホーム・スタジオからは、今後も多くの力作が生まれそうである。



「Acoustic Guitar Stream 45」現在レコーディング中の2枚目。45歳にちなみ、Style 45系のギターを使用してレコーディングされている。発売は今年の8月ごろに予定されている。



「ACOUSTIC GUITAR STREAM」Chunpei Record R-9810397 中北氏の1枚目のCD。氏の所有するヴィンテージギターコレクションを使用してレコーディングされた19曲が収録されている。このCDはアコースティック・ギター専門店もしくは(株)R.O.Mサービス(TEL:0797-87-0561)にて入手できる。

左上はアンビエント用として使用している、レコーディング・スタジオの定番AKGのマイクC-460B。部屋の上方から中北氏を覆うようにセットされている。

その下・右下は、ギターを拾うためのSEIIDEのマイクPCVT-1。あの名器ノイマンに匹敵する性能でコストパフォーマンスも抜群と評判の製品で、何と真空管式だ。取り扱いがややクリティカルなものと、(マイクにしては)大型のファンタム電源を使用しなければならないが、重厚で暖かみのある音質は捨てがたい。最近ではボーカル用としても、その音質から同タイプの真空管式マイクが好まれており、内外の有名アルバムでもしつかりクレジットされているからチェックしてみよう。中北氏がこのマイクをチョイスしたのは、さすがと賞うべきだろう。

左下は録音機材を収納したラックで、ほとんどが一発で手の届く範囲に集められているのが、プロのスタジオ風。上に乗っているのがローランドのミキサー/ハードディスク・レコーダーのVS-880(右下の写真参照)。これとソニーのZA-5ES、TASCAMのDA20 MK IIの2台のDAIがデジタル接続されている(別モニター系統でデジタル出力はアキュフェーズのDAコンバーターDC81Lにつながっており、そのまま超解像オーディオへと送り出される)。CDレコーダーはマランツのCDR-630だ。これらのラインはミキサー・プリアンプのMACKIE(マッキー)LM3204に集約され、テクニクスのグライコを経てパイオニア9500DVスピーカーをマッキントッシュのパワー・アンプMC2600でドライブするというのが、モニター系統No.1だ。本文にあるように、氏はこのほか2系統のモニター・ラインを使い分けている。プロのスタジオでも同位かのモニター・スピーカーを切り替えてバランスの良い音を作る過程があり、その意味では完璧に近い布陣だろう。なお、キーボード類はエレビガフェンダー・ローズ54(珍品)、シンセがローランドA90EX、MIDI音源は同じくローランドのJV2080というラインナップである。